

令和7年9月22日  
学長選考会議

## 学長の業績評価の結果について

公立大学法人名桜大学学長選考会議規程第6条第1項第4号の規定に基づき、学長の業績評価を行いましたので、その結果を公表します。

### 記

#### 1. 評価の経緯

##### (1) 令和7年度第1回学長選考会議（令和7年6月26日開催）

令和5年度及び令和6年度の学長の業績評価の実施方法について、公立大学法人名桜大学学長業績評価実施要項第2条及び第3条の規定に基づき、総合的に評価を行うことを決定した。

##### (2) 令和7年度第2回学長選考会議（令和7年8月22日開催）

学長の業績について、上記（1）の学長の業績評価の実施方法に基づき、総合的に評価を行った。

#### 2. 評価結果

別紙の通り

## I. 大学運営に関する評価

第3期中期目標・中期計画（令和4年4月～令和10年3月）に基づき、学長は強いリーダーシップを発揮し、大学の持続的発展を支える運営体制を確立したと評価できる。令和6年度の法人評価では、92項目中87項目（94.5%）でSまたはA評価を獲得しており、大学経営の安定性と計画遂行能力の高さが裏付けられている。

学長は、大学運営において明確な方針を示し、実効性の高いガバナンス体制の確立に努めてきた。経営・運営方針発表会を開催し、大学の将来像や方針を教職員全体で共有することで、組織としての一体感を高めるとともに、大学運営の方向性を明確に打ち出した点は高く評価できる。

また、会計監査人や監事との定期的な意見交換、複数回にわたる内部監査の実施を通じて、法令遵守と財務健全性を確保し、内部統制機能を着実に強化した。さらに、競争的研究費の適正管理やハラスメント防止策といった重要課題についても、倫理委員会での議論や独自の事例集策定などを推進し、実効性のある取組を展開した点は特筆に値する。

一方で、令和6年4月3日の津波警報発令時には迅速な初動対応が評価されるものの、通信手段や安否確認体制における課題も明らかとなった。これを踏まえ、事業継続計画（BCP）の実効性向上に向けた改善を進めており、危機管理能力の強化に資する取組である点も高く評価できる。

総じて、学長は統合的なガバナンス体制を確立し、内部質保証の実質化、迅速な意思決定、リスクマネジメントの強化を着実に実現した。これにより、大学運営の安定と戦略の両面で大きな成果を挙げたと高く評価できる。

## II. 教育に関する評価

学長のリーダーシップのもと、教育の質向上、国際性を養う教育の推進、また、学生確保に向けて、計画的かつ着実な改革を推進してきた。

教育改革においては、科目ナンバリングやカリキュラム・マップを体系的に整備し、履修ガイドへ反映することで、学生の履修計画の利便性と教育課程の透明性を向上させた。また、卒業研究論文のルーブリック評価や卒業生アンケートを活用して学修成果を可視化し、得られたデータを教育改善に適切に反映させた点は高く評価できる。さらに、FD（Faculty Development）研修会や授業評価アンケートを通じて教員の教育力向上を推進するとともに、教学マネジメント推進部会を設置し、3つのポリシーと教育課程の連携を強化するための規程改正や評価指標の見直しを実施し、内部質保証体制を整備・強化した。加えて、国際文化研究科（修士課程）を4領域から2領域へ再編し、学部教育との接続を強化することで、教育体系の一貫性と学生の学習機会の拡充を実現した。また、教員採用・昇任基準の見直しに向けたワーキンググループを設置し、教育力の高い人材を確保するための仕組み、整備に向けた体制を構築した。さらに、学生の主体的学びを促す教育手法の導入やオンライン学習環境の改善を進め、学修支援体制も着実に整備されている。

国際性を養う教育では、「グローバル教養プログラム」の教育課程の確定により、国際的視野を育成する教育体制を整備した。また、サザンクロス大学との連携による「キャンパス内留学プログラム」の導入に向け、在学中から異文化交流を体験できる環境の準備を進めた。さらに、ブラジル、マレーシア、ポーランド、チェコ共和国などの大学との新規協定締結により留学先を多様化させ、留学生の受入・派遣実績の増加と国際交流の活性化を実現した点は高く評価できる。

入試制度改革では、入学者選抜枠や推薦基準を見直し、多様な学生を安定的に確保できる仕組みを構築した。加えて、SNSを活用した広報を強化し、フォロワー数は前年度の約3倍に増加、大学の認知度と魅力発信力が大幅に向上し、志願者数・入学者数ともに改善傾向を示した。

総じて、学長のリーダーシップのもと、名桜大学は教育の質向上と国際競争力の強化を着実に推進し、学生確保と教育環境の充実を両立させる大きな成果を挙げたと高く評価できる。

### Ⅲ. 研究に関する評価

学長は、研究環境の改善、研究支援体制の強化、地域・国際連携の拡充、研究倫理体制の整備を総合的に推進し、大学の研究力向上に大きく寄与したと評価できる。

URA (University Research Administrator) に係る人材の確保、サバティカル制度の整備、外部資金獲得に向けた戦略的取組は、大学の競争力を高める施策として高く評価できる。また、研究成果の国際的発信力の強化や学際的研究の推進は、今後の本学研究活動の更なる発展に資する重要な方向性である。

研究者総覧の見直しによる researchmap 登録率 99%の達成、URA 配置による研究支援機能の強化、学内外の多様な研究者との協働体制の構築は、いずれも顕著な成果である。

総じて、学長は研究基盤を強化するとともに、学際的・国際的研究の推進に向けた体制整備を着実に進め、本学の研究力向上に大きく貢献したと評価できる。

### Ⅳ. 地域貢献に関する評価

学長は、地域との協働を軸とした教育・研究・健康支援活動を計画的かつ着実に推進し、顕著な成果を挙げている。

特に、地域住民・学生・教員が連携した健康支援体制の構築は、COI-NEXT やんばるプロジェクト検診をはじめとする活動を通じて大きく進展し、地域住民の健康増進と学生の実践的学びの双方に寄与している。

また、教員養成を中心とする人材育成では、教員養成講座から多数の採用試験合格者を輩出し、教育委員会との連携による研修体制を確立するなど、地域教育力の向上に大きく貢献した。さらに、やんばる未来人づくり「さくら」プラットフォームの構築に向けた検

討やリカレント教育の定着を図り、公開講座や地域出前講座においても高い評価を得ている。

これらの取組は、地域社会への貢献と大学の研究・教育基盤の強化を両立させた点で高く評価される。地域住民・学生・企業・教職員が連携することで、教育・研究の質向上と地域課題の解決を同時に実現しており、今後のさらなる発展が期待される。

## V. 特記すべき事項（総合評価）

学長は、教育・研究・社会貢献・大学運営の各分野において、計画的かつ実効性の高い取組を着実に推進し、公立大学としての実績を確実に積み重ねてきた。

教育面では、教員養成を中心とする人材育成の強化や高大接続事業の充実により、地域社会に貢献する教育力を高めた。

研究面では、サバティカル制度の活用促進や URA の採用決定など研究環境の整備を進めるとともに、琉球文学大系事業や湧川文庫デジタルアーカイブ化の推進により学術的発信力を向上させた。

さらに、COI-NEXT に基づく「やんばる版プロジェクト検診」、やんばる未来人づくり「さくら」プラットフォームの構築に向けた検討、リカレント教育など、地域住民・学生・企業・教職員が連携する健康支援・教育活動を展開し、地域課題の解決と次世代人材育成を同時に実現している。また、ステークホルダー委員会の安定的な運営、内部監査や BCP 見直しによるガバナンス強化など、大学運営全般における多角的な進展も学長のリーダーシップの成果として高く評価できる。

総じて、学長は地域社会への貢献と大学の研究・教育基盤の強化を高い水準で両立させ、本学が「地域と共に成長する大学」としての使命を果たすための確かな発展基盤を形成したと高く評価できる。